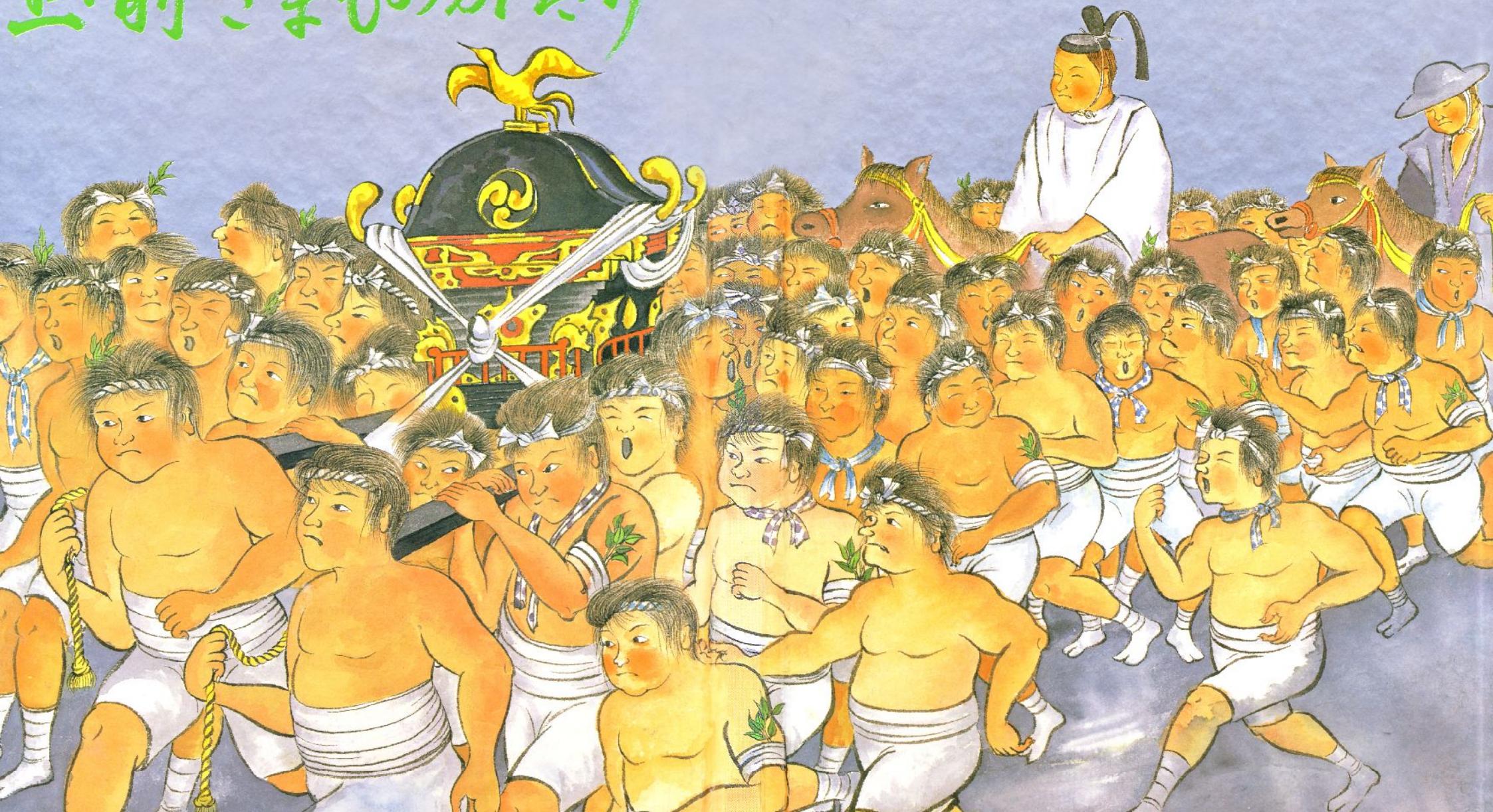
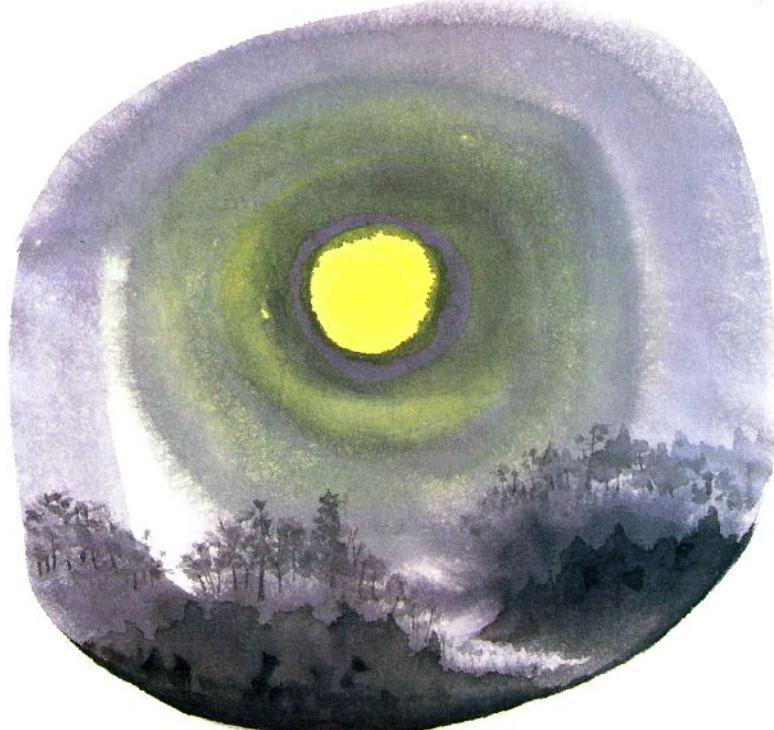


かずさ一宮
玉前さまものがたり



かずさ一宮 玉・前さまものがたり



秋の夜空に

大きなお月さまが、

かかるところになると、

このあたりの村々では、

お祭りのしたくを

はじめる。

何しろ、

一宮の玉前さまといえば、

大昔から上総の国

一番のおやしろだから、

お祭りの日には、

神さまたちが、

みこしに乗つて
ござらうしやる。

それには、こんな話がある。

むかし
昔々のことだが、
たいとう
太東の釣ヶ崎の沖で、

よ
夜ごと夜ごと、

きらきら、きらきらと

ひかるものがあつた。

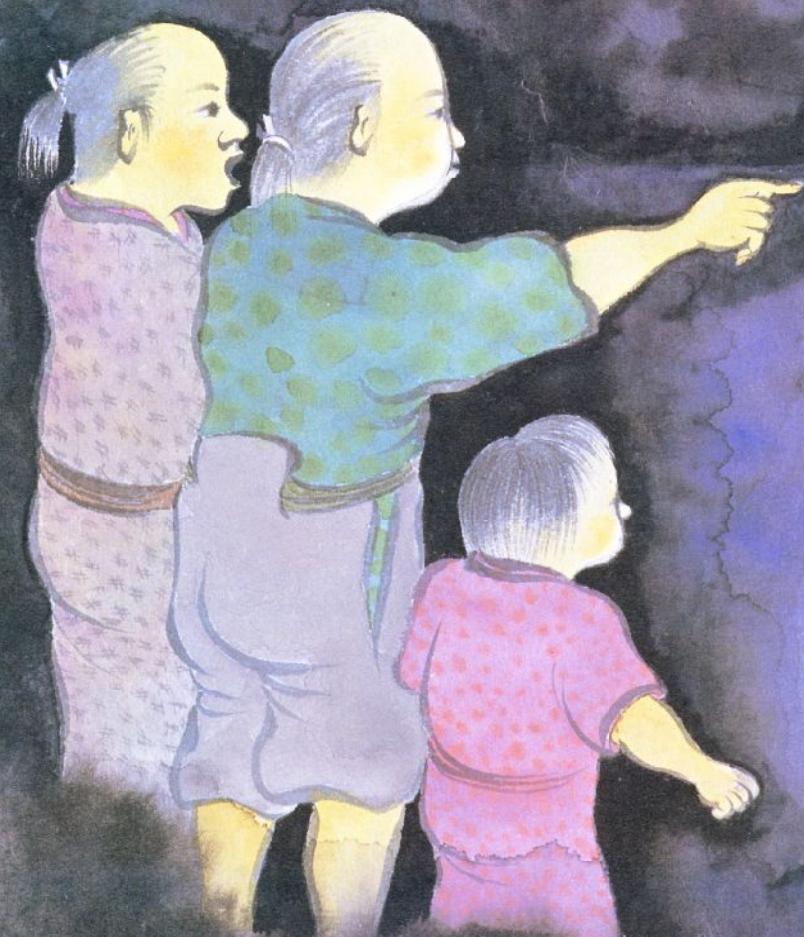
これを見た浜の者たちは、

「あの光るものは、いつたい何だろう。」

「何か、あやしいものではないのか。」

「いや、あんなにみごとに美しく光るのだから、
あやしいものではあるまいよ。」

などと、日々にうわさし合つたそつだ。



ある朝早く、

おじいさんは、

塩くみのおじいさんが浜辺を歩いていると、

波打ちぎわに光るものがあつた。

そばへよつてみると、

赤ん坊のにぎりこぶしぐらいの

美しい玉石が波にあらわれていた。

腰をのばして、

もう一度波打ちぎわをよく見ると、

美しく光る石が、

大きな波に次から次へと

打ちよせられて来るではないか。

「おお、おお、きれいな石じや、石じや。」

かぞえてみると、ぜんぶで十二こもあつた。



その光る石をかごに入れて、

うちの中の壁に下げるべくと、

夜の暗やみの中でも、きらきらと光り、

へやが明るくなるほどであった。

その夜、塩くみのおじいさんは、夢を見た。

「この光る玉石は、

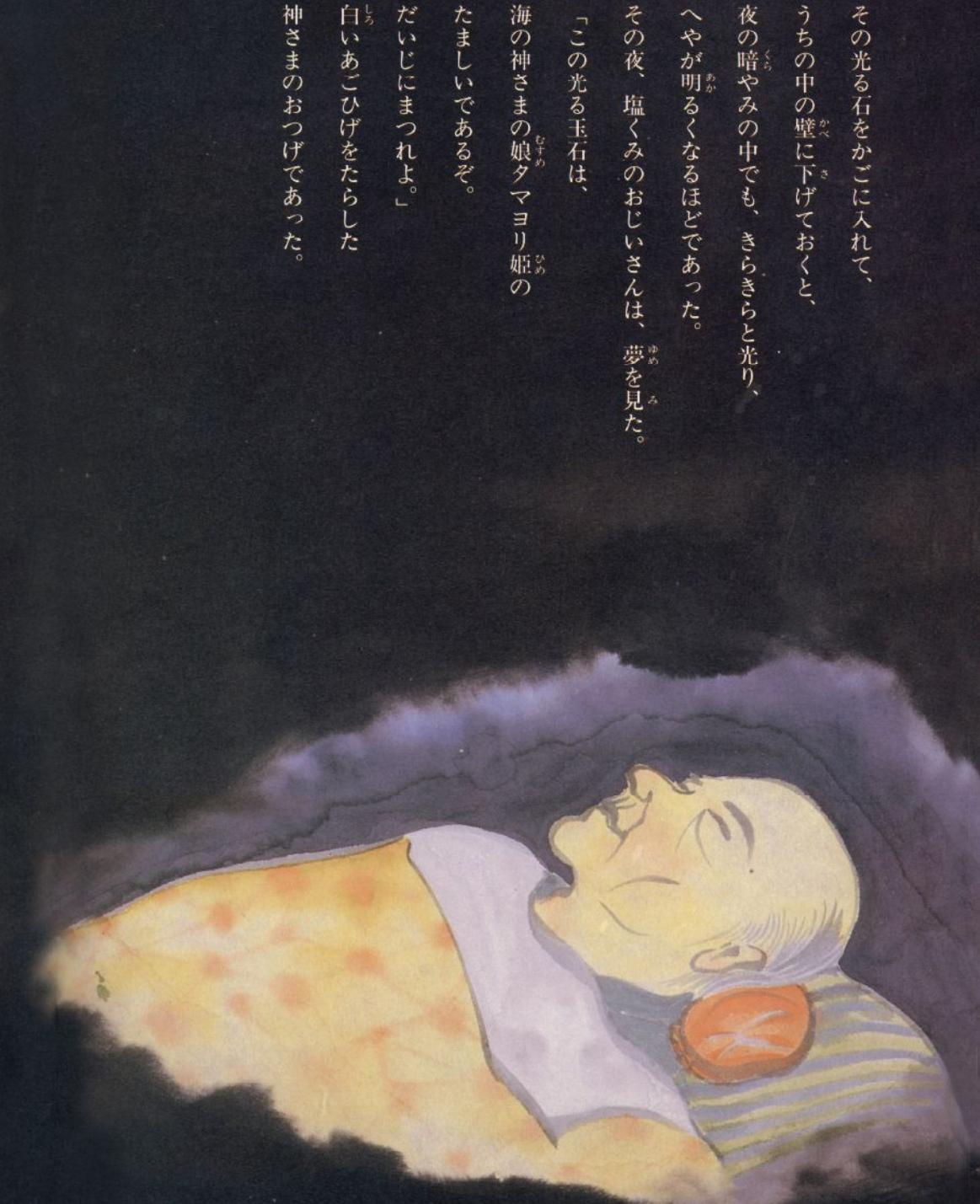
海の神さまの娘タマヨリ姫の

たましいであるぞ。

だいじにまつれよ。」

白いあごひげをたらした

神さまのおつげであつた。



そこで、一宮や、

茂原・睦沢・

岬などに神社をたてて、

大宮と若宮に、

それぞれ光る玉石をまつたのだそうな。

昔々、ホデリとホオリという兄と弟がいた。

お兄さんのホデリは

太東岬の釣ヶ崎のあたりで、

いつも魚をとり、

弟のホオリは鳴山あたりで、

いつもけものや木の実をとつて暮らしていた。

それで、人々はホデリを「海幸彦」、

ホオリを「山幸彦」と呼んでいた。

あるとき、弟の山幸彦がこういった。

「お兄さん、たまには仕事を

とりかえてみませんか。

いつもいつも同じ仕事をしていて、
すっかりあきてしました。

お兄さんのように広い海を見ながら
魚をとつてみたいのです。」

「それは、だめだ。なれない仕事をしても、
うまく行くわけがないぞ。」

お兄さんの海幸彦は、

相手してくれなかつた。

それでも、山幸彦はあきらめないで、

二度も三度もお兄さんにおねがいした。

「そんなにホオリが、やつてみたいならば、
おまえのたのみを聞いてやろう。」

だが、この釣り針は、

お父さんからいただいた

とてもだいじな物だから、

けつしてなくしてはならないぞ。」

「やっぱり、おれのお兄さんだ。」

ほんとうにありがとう。」



山幸彦は、もううれしくてたまらない。

すぐに釣り道具どうぐをもって、

釣ヶ崎の浜へ出かけた。

「ようし、お兄さんになんか負けられないぞ。
大物をいっぱい釣つてやるからな。」



だが、魚うおは一びきもからなかつた。

それはかりか、しまいには、

お兄さんのだいじにしていた釣り針までも

魚にとられてしまった。

「こまつたなあ、お兄さんになんといつて、
おわびしたらいいのだろう。」

山幸彦は、しょんぼりとして、

山の中のうちへかえって行つた。

何日かすると、海幸彦がやつて來た。

「やつぱり、なれない仕事は、うまく行かないものだ。ほれ、弓矢を返すから、釣り道具も返してくれ。」

山幸彦は、困ってしまった。

もじもじしていると、

「どうしたのだ、ホオリ。だいじな釣り針を早く返せ。」

海幸彦が、大きな声を出した。



「お兄さん。もうしわけありません。釣り針をなくしてしまったのです。」

「何だと。あれほどだいじな物だと

いつておいたではないか。」

海の底へもぐつても、あの釣り針をさがして来い。」

お兄さんの海幸彦は、

かんかんにおこつて、もどつて行つた。

「ああ、どうしよう。そうだ、しかたがない。

この剣をつぶして、たくさんの釣り針を作つて、

おわびをしよう。」

山幸彦は、命から二一番目にだいじな

「十つかの剣」をとり出すと、

火をごうごうともやして、その中につつこんだ。

釣り針作りに精を出していると、

「山幸彦がぶりぶりしてやつて来て、

海さちも、自分がさちさち、

今は、それぞれ さちを返さん。」

山幸彦が作った五百本もの釣り針には

見むきもしない。

「お兄さん。釣り針を千本作りますから、

どうかおゆるしください。」

と、山幸彦が何度もおわびをしても、

海幸彦は返事もしないでもどつて行つてしまつた。



*「さあ」とは、しあわせをいいます。
「それぞれ、自分のとくいなことを
やることが、一ぱんしあわせ」
というとなんと言葉。

山幸彦は、お兄さんにゆるしてもらおうと、
また精を出して、釣り針作りをしていると、

「山さちも、自分がさちさち、

今は、それぞれ さちを返さん。」

海幸彦がやつて來た。

だが、山幸彦が苦勞して作った
千本もの釣り針には見むきもしない。



山幸彦が、釣ヶ崎の浜辺をとほとほと歩いていると、
雁が、わなにつかまって、もがいていた。

「おお、かわいそうに。早く巣にもどつて、
ひなどりの世話をしてもやれよ。」

わなからはずしてやると、雁はうれしそうに
山の方へ飛んで行つた。

そこへ塩くみのおじいさんがやつて来て、

「おまえは、とてもよいことをしてやつたな。
なにか困っていることがあるようだが、

よかつたら力になろうぞ。」

わけを話すと、

海の神さまが乗る大きな大きなワニザメを呼んだ。

「それならば、海の底のお宮に来て、

釣り針をさがせばよいでしょう。」

大ワニザメは、

子ワニザメを呼んで、

山幸彦を

お宮にあんないするようにいった。

子ワニザメの背中に乗ると、

お宮までは、

ちょうどまる一日がかつたそだ。

「山幸さん、つきましたよ。」

子ワニザメの声にそろうつと日をあけると、
きれいな浜辺があり、

そのむこうには、

りっぱなお宮がたつていた。

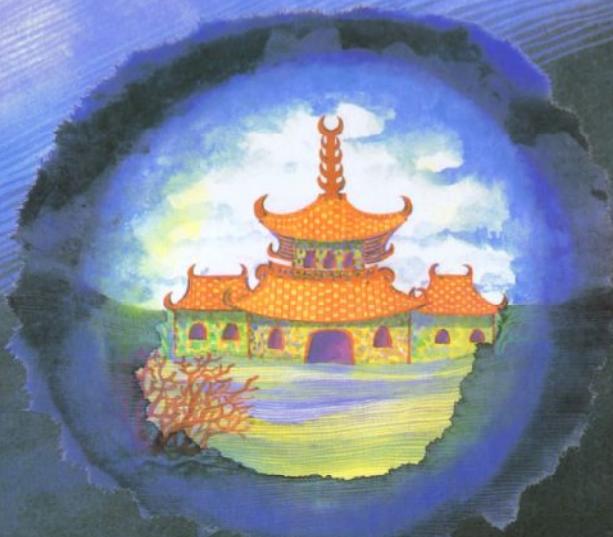
お宮は、にじのように赤・青・黄・緑・紫などの

色がまじりあつて、さらさらと輝いていた。

「あのお宮のかべには、いろいろな魚たちのうろこが、
はらされています。

だから、にじのように光っているのです。」

「ほほう、海の底には、龍宮城りゆうぐうじやくがあるというが、
きっと、このお宮がそうにちがいない。」



山幸彦は、

お宮の門のそばの桂の木にのぼつて、
うつとりと見とれていた。

そこへ、海の神さまの娘トヨタマ姫が
水をくみにやつて来た。

そして、井戸の中をのぞくと、
美しい若者の顔が水にうつっていた。

「あつ。」

おどろいた姫は、

思わずかめを落としてしまい、

あわててお宮の中に入つてしまつた。

そして、父の神さまにそのことを話した。



お宮の中にあんないされた山幸彦は、
そのみごとなへやにびつくりした。

赤や白のさんごの柱に、

あしかの毛皮や絹のしきものなどが
あつく敷かれているへやで、

たくさんのおいしいごちそうが出された。
あつという間にたつた。

海の神さまは、

山幸彦にこういった。

「わしの娘のトヨタマ姫をよめにもらつてくれまいか。

そして、ここにゆつくりと、とどまってくれるとよい。」



山幸彦は、

天てんにものぼるばかりに
しあわせであった。

そして、

三年の月日月日が、

あつという間にたつた。



ある日、山幸彦は、

お兄さんのだいじな釣り針を
さがしているのを思い出して、

「ふうつ。」と、ため息をついた。

「あなたは、何がつらいのですか。」

トヨタマ姫は、

ふしぎそうにたずねた。

山幸彦が、そのわけを話すと、

姫は、父の神さまにおねがいした。

「どうか、なくした釣り針を

さがしてやつてください。」

「それでは、魚たちを集めて、
たずねるとしよう。」

集まつて来た魚たちにたずねると、

「ああ、それならば、

鯛さんののどにかかるている
針にちがいありません。」

「そういうば、このごろでは、
物を飲みこむこともできないで
困つております。」

「きょうも、それでここに
来られないほどです。」

「鯛さんを

何とかお助けくださいませんか。
おねがいいたします。」

そこで、

海の神さまはカニを使いにやつて、
鯛ののどにささっていた

釣り針をぬかせた。

その釣り針を見た山幸彦は、

「この釣り針にちがいありません。

これを持つて、かえさせていただきます。

なが
長い間ありがとうございました。」

と、お札をいうと、

父の神さまが、
「これは、むりなことをいう者がいたら
おぼれさせ、

おぼれている者がいたら

救つてやれる玉だからだいじにせよ。」

と、いつて、「潮みつ玉」と

「潮ひる玉」をみやげにくれた。



山幸彦が、

いよいよ釣ヶ崎にもどる日が来た。

トヨタマ姫はわかれのときにこういった。

「わたしのおなかの中には、あなたの子どもがおります。

風のつよい日にあなたをおいかけて行きます。

よいところに家をたてておいてください。

わたしは、そこで子どもをうみます。」

山幸彦は、よろこんで、

「それは、とてもうれしい話だ。

もどつたらすぐにおまえの家を

たてることにしよう。」

と約束した。

山幸彦は、お宮の者たちに別れをつげると、

子ワニザメに乗り、

まる一日をかけて釣ヶ崎の浜辺にかえって來た。

そして、お兄さんの海幸彦に

だいじな釣り針を返すことができた。

それでも、

お兄さんは、ときどきやつて來て、

いじわるをするので、

そのときには、

潮ひる玉や潮みつ玉をつかって、

おいかえしてしまってのだそくな。



しばらくぶりに家におちついた山幸彦は、

のんびりしているうちに月日がたつてしまつた。

ある風のつよい朝。

海には大波おほなみが馬うまのたてがみのように、

ドウンドウンとおし寄せていた。

その波に乗つて、トヨタマ姫が

妹のタマヨリ姫をつれて、

浜にあがつて來た。

そして、

こんもりとしげつた森の中の池で、

こつそりと体をあらつた。

それから、この池を

「神あらいの井戸」と呼ぶ。

「ここには、今でも

「神あらいさま」の
ほこらがある。



山幸彦は、

とてもあわててしまつた。

まだ、約束の家は、たててなかつたのだ。

しかも、「もうすぐ子どもがうまれる」という。

あわてて、子どもをうむのによいところをさがし、

柱を立て、鶴の羽はねとカヤで屋根やねをふいた。

だが、その屋根を

全部ぜんぶふきおわらないうちにトヨタマ姫は、くるしみ出して、
「子どもをうむわたしの姿は、せつたいにのぞいてはなりません。
すがた

これはきっとですよ。」
「すがた」というと、小屋こやの中に入つてしまつた。

そのうちに、

姫のくるしみ、もがく、うめき声が、聞こえて來た、

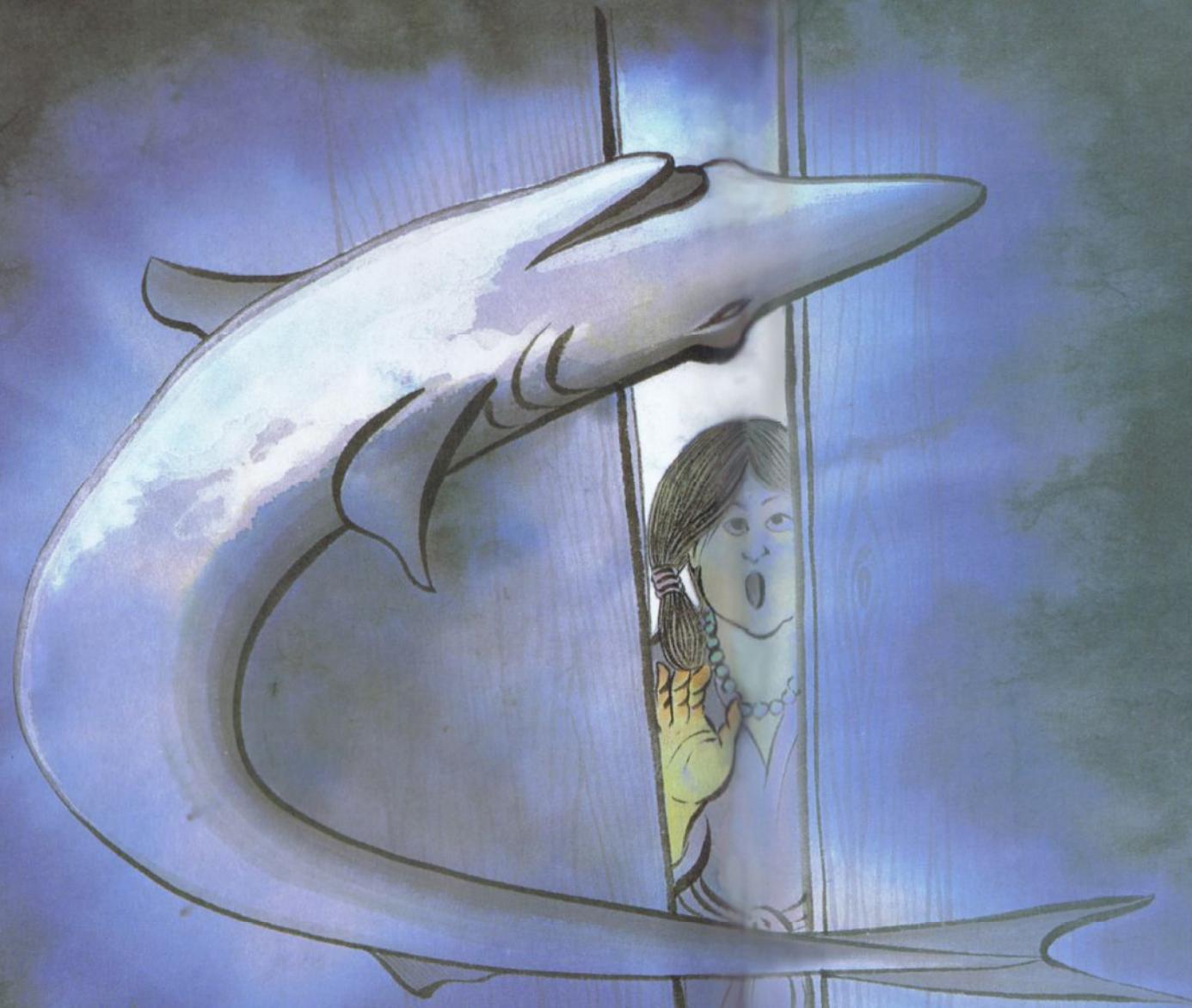
山幸彦は、じつとしてはいられない。

小屋のまわりをうろうろしていたが、

とうとう、「見てはいけない」という

小屋の中をすきまから、のぞいてしまった。

「あつ！」



小屋の中には、なんと大きな大きなワニザメが、
身をくねらせ、のたうちまわって、
くるんでいるではないか。

すっかりおどろいた山幸彦は、山の奥へ逃げこんでしまった。

トヨタマ姫は、くるしんだ末に

元気な男の子をうみおとすと、

山幸彦がのぞき見したことを

ひどくおこり、

太東岬の崖の上から身をおどらせて、
海へとびこんでしまつた。

大きな大きなワニザメが、

海面を尾でたたき、ひれで水をかくたびに

海は荒れくるい、

潮をはくたびに

波と波とがぶつかり合い、

おそろしい津波を引きおこして、

陸地をおそつた。

その大しけは

三日三晩もつづき、

人々はまるで

生きた心地もなかつた。

それで、漁師たちは、

「今でも太東の沖には、

旦那がいる」

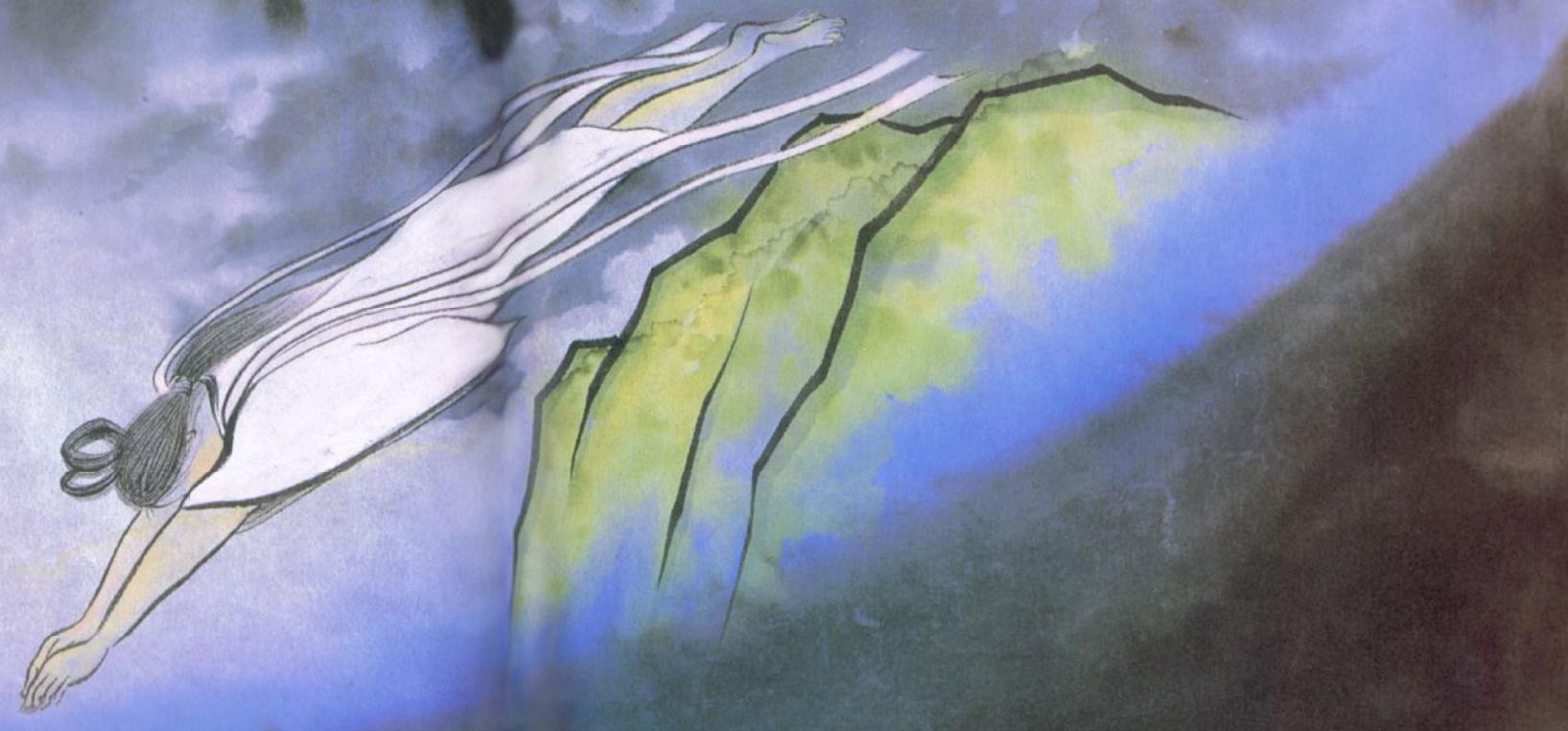
と、いいつたえていて、

船でとおるときには

札をするという。

それは、

ウロコの宮のワニザメが
海の神まだからだろうよ。



この男の子の世話をしたのは、

トヨタマ姫の妹のタマヨリ姫で、

二人は、のちに夫婦となつて、

仲よく暮らした。

それで、男の子は、

ウガヤフキアエズノ命と名づけられた。

この神さまは陸沢町岩井の鵜羽神社にまつられている。

だから、

タマヨリ姫をまつる一宮の玉前神社のお祭りでは、

九月十日に鵜羽神社のみこしがやつて来る。

それで、

みこしのかつぎ手は、
「できやつさえ　できやつさえ

あすはねえど

きょうぎりだ　きょうぎりだ」

と、唱えて、

タマヨリ姫とウガヤフキアエズノ命が、

いつまでも幸せに暮らすことを

ねがうのだそくな。

＊ウガヤフキアエズ

鵜の羽とカヤの屋根が
ふきおわらないうちに
うまれた、ということ。



はだか祭りの玉前さまよ

十二社みこしが磯いそを舞まいう

年に一度は

タマヨリ姫やウガヤフキアエズノ命、山幸彦などが、
みこしに乗って、釣ヶ崎に集まり、大漁たいぎょや、豊作ほうさくを祈る。

そろうた そろうた

そろうて 別わかれがなけりやい

みこし同士じとうしが、もみ合い、

ぶつかり合つて、別れをおしむ。

そして、玉前さまのみこしは、ほかのみこしに見おくられて、

「神かん」の道みち」をもどつて行く。

そして、夜おそくまで町なかをねり歩あるく。

おしまい

